琉球大学学術リポジトリ

琉球宮古諸方言の音韻：琉球宮古方言の音声資料の収集・研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 狩俣繁久 公開日: 2009-02-25 キーワード (Ja): 琉球方言, 宮古諸方言, 平良方言, 音声資料 キーワード (En): RYUKYU DIALECTS, DIALECT OF MIYAKO ISLANDS, HIRARA DIALECT, DATA OF PHONETIC 作成者: 狩俣, 繁久, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8908

2．宮古諸方言の位置づけ

2.1. 琉球諸方言の下位区分

赤道付近で地球の自転と逆の西向きにながれる海流は、フィリピンちかくの大陸棚にぶつかって北に向きをかえ、台湾と与那国島のあいだをとおって東シナ海にながれこむ。その日本海流（黒潮）は奄美大島とトカラ列島のあいだをとおって、再び太平洋にながれていく。この黒潮によって区切られた地域が琉球列島であり、この地域ではなされていることばが琉球諸方言である。そして、この地域は、1609年に島津藩によって侵略され、与論島以北の奄美諸島が割譲される以前の琉球王国の支配圏と一致する。

ひろい海域に点在する琉球列島の島々で話されている北の端と南の端の方言とでは話が通じないほどおおきくことなっている。奄美大島、沖縄本島、徳之島、宮古島などのおおきな島ではその島の内部の方言差もちいさくない。たとえば、沖縄本島の諸方言は、北部方言と中南部方言とのふたつの方言グループにおおきくわけられるし、奄美大島でも奄美大島北部方言と南部方言とのふたつの下位方言に区分される。しかし、与論島方言とか、沖永良部島方言とかいうように、「島」を単位に下位区分するのは、島には島内部でのひとまとまり性があって、相対的に独立した方言圏をなしているからである。

琉球諸方言の最小の単位は、「シマ」と方言でよばれる村落共同体である。そのシマは政治的にくぎられた単位であるだけでなく、祭祀や婚姻をおこなう単位でもあり、シマの独立性は近年までたもたれていた。イントネーションやいくつかの単語のいいまわしなどにシマごとのちがいがあって、地元の人々はそのちがいに非常に敏感である。かつて、沖縄本島北部のある村のベテランの戸籍係は、「戸籍抄本ください」といってくる村人の発音や抑揚をきいただけで、その村人の村落の帳簿をだしてきたという。戦前の沖縄で唯一の都市を形成していた那覇でも、久米の方言と泊の方言とはことなっていたし、若狭の方言と泉崎の方言もことなっていた。人々はそのシマ出身の両親のもとにうまれ、そのシマにそだち、そのシマ出身の配偶者をもとめた。そんな時代に、シマは方言の最小の単位でもあった。

共通の特徴をもつ、ふたつ以上、ときにはよっつ、あるいは、いつつ以上の村落で形成される小方言グループがある。これらの小グループがあつまって、もうすこしお

おきな方言グループが形成される。かつて、間切とよばれた、現在の市町村に相当する、琉球王国時代の政治的区分があった。沖縄言語研究センター（代表上村幸雄）が1979年から1992年までの12年間に琉球列島の全集落を対象にした言語地理学的調査の成果から、この間切をひとつの構成単位とする方言グループが確認できる。この方言グループがいくつかあつまって、さらにおおきな方言群が形成される。

琉球諸方言は、奄美諸島、沖縄諸島ではなされている奄美沖縄方言群（北琉球諸方言ともいう）と宮古諸島、八重山諸島ではなされている宮古八重山方言群（南琉球諸方言ともいう）のふたつの方言群におおきくわかれている。このふたつの方言群は、３００キロメートル弱の島のない海域によってへだてられている。この海域は、島のまったくない距離としては、カムチャツカ、千島列島、日本列島から琉球列島をへて、台湾、バシー海峡、フィリピン諸島、そしてスラヴェシ島、ニューギニアとつづく、ユーラシア大陸の東側、西太平洋に列状につらなる、いくつもの島々のなかでもっともながい。ふたつの方言群のちがいは、発音の上でも文法の上でも語彙の上でも顕著にみられ、たがいに方言での意志の疎通がはかれないほどである。

奄美沖縄方言群と宮古八重山方言群は、つぎのような下位グループにわけることができる。

- 奄美沖縄方言群
  - 奄美徳之島諸方言
  - 沖永良部与論沖縄北部諸方言
  - 沖縄中南部諸方言
- 宮古八重山方言群
  - 宮古諸方言
  - 八重山諸方言
  - 与那国方言

注）琉球諸方言の「シマ」（宮古諸方言では〔ṣｍａ〕）は、(1)海に囲まれた陸地island、島、の意味のほかに、(2)村落、集落、(3)故郷、出身の村落、(4)領地などの意味もあらわす。

2.2. 音韻変化における aero-dynamic な条件

琉球諸方言全体に共通にみられる特徴として、奥舌半ひろ母音／o／の奥舌せま母音／u／への変化がある。奄美沖縄方言群（北琉球諸方言ともいう）に共通の特徴として前舌半ひろ母音／e／の中舌せま母音／ï／への変化、あるいは、前舌せま母音／i／への変化がある。

宮古八重山方言群では、奄美沖縄方言群とおなじように奥舌半ひろ母音／o／が奥舌せま母音／u／に変化するが、前舌せま母音／i／が舌先母音／ɿ／に変化し、それと同時に、前舌半ひろ母音／e／が前舌せま母音／i／に変化していて、この点で奄美沖縄方言群とことなる様相をみせている。

奄美沖縄方言群、宮古八重山方言群にみられる、これらの変化は、いずれも「せま母音化」とよばれる。このせま母音化は、琉球諸方言全体にみられるが、この変化が本土諸方言と琉球諸方言をわける発音上の特徴でもある。

琉球諸方言のせま母音化は、つよい呼気流が原因でおこったことを、上村幸雄1987「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか－英語の Grate Vowel Sift についての考察－」、上村幸雄1989「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか(2)－琉球列島諸方言のばあい－」などの一連の論文においてのべている。上村幸雄1997「音声研究と琉球方言学」は、つよい呼気がいかに音声器官に影響をあたえるかをつぎのようにのべている。

> 音声は音声器官をながれる空気の aero-dynamic なエネルギーを喉頭、舌、口びるなどの音声器官のmyo-elastic なエネルギーによって音響エネルギーに変換することによって生成される。（略）
>
> もし声道をながれる気流がはげしければ、あるいは声道内の気圧がたかまれば、それは声道自体に影響をあたえ、頬、口びる、舌、軟口蓋、咽頭、喉頭の内壁を形作る組織の位置や形に微妙な影響をあたえる。またこれらの組織は、つよい気流、たかい気圧に対抗するために筋肉的に緊張することによって、その位置、形状に微妙な変化を生じ、その結果、呼気の通路としての、そして音響管としての声道の特徴を変化させ、それによって生成される音声を変化させる。つよい呼気流が、またそれに対抗するための舌の緊張が母音、とくにせま母音の舌の位置と形に影響をあたえることは超音波的方法によって確認することができる。

上村幸雄1989は、宮古八重山方言群の呼気のつかいかたが奄美沖縄方言群のそれにくらべてつよいこと、奄美、沖縄の諸方言では喉頭の緊張がそれにともなうことなどをのべたあとに、「せま母音化」についてつぎのようにのべている。

……奄美沖縄方言群と宮古八重山方言群との呼気の使用方法のちがいこそが両者の母音フォネームの体系、そしてそれにいたった音韻変化のありかたのちがいをうんだ原因となったとみることができる。すなわち、声道において生ずる「おしやり」と「ふんばり」の程度が宮古八重山方言群においていっそうつよいことが、この地域での／ｉ／→／ɿ／（前舌母音の舌先母音化）と／ｅ／→／ｉ／（前舌半せま母音のせま母音化）という東北北部方言のそれにいてそれよりはいっそうはげしい音韻変化をひきおこしたのであろう。一方、奄美沖縄方言群で本土方言／ｉ／に対応する／ｉ／がたもたれつづけるのは喉頭の緊張によってつよい呼気流の発生が抑制されているからであり、一方／ｅ／→／ï／という音韻変化がおこるのは、「ふんばり」の程度のちいさい、緊張度のたかくない状態にある舌のうける「おしやり」を契機としておこったと解される。ひろ母音、半ひろ母音のばあい、喉頭の緊張の程度がちいさく、したがって呼気流は喉頭でさして抑制されず、せま母音のばあいよりつよめの呼気流が声道を通過する。／ｅ／において中程度にもちあがった舌は，つよい呼気流に対して緊張してつよいふんばりがおきるばあいにはせま母音／ｉ／の方向へと変化し（宮古八重山方言群、東北諸方言、英語）、そのようなふんばりがないばあいには「おしやり」によって中舌面が硬口蓋後部に接近して中舌的な音色の母音／ï／の方向へと変化するのであると理解される。

なお，琉球列島地域の全域でおきる／ｏ／→／ｕ／の変化は英語の大母音推移のばあいと同様に，「おしやり」の結果であると理解されるが，本土方言の／ｅ／に対応する／ï／をたもつ奄美大島，徳之島方言でこの／ｏ／→／ｕ／の音韻変化が完成されず，いろいろなばあいに／ｏ／をたもっている（例：名瀬／k'u「ｍｏ／<雲>）。これはやはり「おしやり」と「ふんばり」の程度のつよさとかかわっている現象であろう。

そしてさらに，琉球諸方言におこった音韻変化が空気力学的(aero-dynamic)な条件と筋弾性的(myo-elastic) な条件の相互作用、反作用が原因でおこるとのべている。

本稿では上村幸雄の諸論文にしめされた方法にまなびながら、そこに提示された仮説を、宮古諸方言に、細部にわたって適用しようとこころみるものである。しかし、残念ながら、私の力不足のために十分に適用できなかった方言や現象もおおいし、また、私の理解が不十分なために、あるいは、あやまった理解のためにおかしたまちがいもあるだろう。その責任はすべて私のものである。今後、さらに調査、研究をすすめて資料の追加、あやまりの訂正などをはかっていくつもりである。おおくの方々のご指導、ご批判をたまわりたい。

2.2.1. 母音のばあい

奄美沖縄方言群、宮古八重山方言群ともに奥舌半ひろ母音／o／の奥舌のせま母音／u／への変化が共通にみられる。

【表1】	腿	夜	帆
名瀬方言	mumu	juru:	Φu
今帰仁方言	mumu:	juru	p'u:
首里方言	mumu	juru	Φu:
平良方言	mumu	ju^{z}ɿ	pu:
石垣方言	mumu	ju:rɿ	pu:
与那国方言	mumu	duru	hu:

一方、前舌半ひろ母音／e／の前舌せま母音／i／への変化は、奄美沖縄方言群と宮古八重山方言群とではことなる様相をみせる。奄美沖縄方言群では前舌半ひろ母音／e／が中舌せま母音／ï／に変化し（【表2】名瀬方言「目」「毛」）、さらに、沖縄諸島方言や沖永良部島、与論島の方言ではそれが前舌せま母音／i／に変化して、従来の前舌せま母音／i／と統合する（【表2】今帰仁方言、首里方言）。

奄美沖縄方言群

e → ï（→ i）

i → i

それに対して、宮古八重山方言群の前舌半ひろ母音／e／は／i／に変化（【表2】平良方言、石垣方言「目」「毛」）し、前舌のせま母音／i／が舌先母音／ɿ／に変化している（【表2】平良方言、石垣方言「肝」）。宮古八重山方言群の方が呼気がつよく、母音をより「せま母音化」させているのである。

宮古八重山方言群のなかには、与那国方言のように舌先母音／ɿ／をさらに／i／に変化させ、すなわち、結果としてもとにもどってしまって、／e／から変化してきた／i／と統合している方言もある。この／i／にもどってしまう方言は、つよかった呼気がのちの時代によわくなったとかんがえられる方言である。

宮古八重山方言群

e → i

i → ɿ（→ i）

【表2】	目	毛	肝
名瀬方言	mï	k'ï	k'imu
今帰仁方言	mi:	k'i:	tʒimu:
首里方言	mi:	ki:	tʃimu
平良方言	mi:	ki:	kˢɿmu
石垣方言	mi:	ki:	kɿmu
与那国方言	mi:	ki:	tʒimu

母音システムにおける奄美沖縄方言群と宮古八重山方言群とのちがいは、呼気のつよさのちがいがうみだしたものであることはさきに引用したとおりである。一般的に、宮古八重山方言群の呼気は、奄美沖縄方言群の呼気よりもつよく感じられる。宮古八重山方言群では、あとでのべるように、この呼気のつよさが原因になっておこったさまざまな音韻変化がみられる。

宮古八重山方言群に特徴的にみられる舌先母音／ɿ／は、かつておおくの方言研究者によって中舌せま母音／ï／とみなされ、奄美沖縄方言群と宮古八重山方言群とではまったく逆の変化がおきているかのようにみなされていた。しかし、それがまったくの誤解であり、上村幸雄1989は、これまで中舌せま母音／ï／とみなされてきたものが舌先母音／ɿ／であることを指摘している。

宮古八重山方言群では前舌せま母音／i／をまえにおしやって、舌先母音／ɿ／に

変化させるほどに呼気がつよいとかんがえられる。波照間島の方言に典型的にみられるように、このつよい呼気がひろ母音／ａ／を無声化させ、さらに後続する有声子音を無声化させる。

〔ｐａ̥ɲａ〕鼻、〔ｐａ̥ɾａ〕柱。

（注）上村幸雄1989によると舌先母音ɿとはつぎのようなものである。

標準語／ｉ／に対応する宮古方言の「中舌的な」音色を有する母音が宮古方言における子音／ｓ／の調音と基本的におなじであることは、私もひさしく前から直接確認ずみのことであった。その〔ｓ〕は舌尖的ではなく、舌べり的なそれであるが、私はその母音を舌先が〔ｓ〕の位置をとったために摩擦音をともなって発せられる中舌母音（ただし、おなじ中舌でも、奄美大島のそれにくらべれば、前より）とみなしていた。母音の音色からみてそのように判断されたからである。しかしその観察（おおくの宮古方言研究者のそれとおなじ）はあやまっており、この母音は舌の最高点も、口蓋と舌の間でできる狭窄の位置も基本母音より前、すなわち母音四角形の外側にあること、したがって中舌母音ではなく、D. Jones 以来の分類にはない舌先的母音であることが母音の調音運動の詳細な研究を通じて確実となった。

2.2.2. 子音のばあい

破裂音／ｐ／／ｋ／をくらべると、宮古八重山方言群のそれは、〔ｐʰ〕〔ｋʰ〕と表記したくなるほどのつよい帯気音が破裂の直後にきかれる。それに対して、奄美沖縄方言群の破裂音、とくに喉頭音化していない破裂音／ｐ／／ｋ／は、破裂がよわく、やわらかい。とくに沖永良部与論沖縄北部諸方言のそれは破裂が非常によわく、気音もやわらかい。沖縄本島北部の大宜味村大宜味の／ｐ／は〔Φ〕にききまちがえられるほど、破裂がよわく、〔ᵖΦ〕のように表記することができる。

注）服部四郎1951には、呼気のよわい奄美沖縄方言群の／ｐ／がつぎのように記述されている。

琉球語今帰仁村与那嶺方言の〔ｐ〕は息の閉鎖音であるが、呼気が弱く、気圧がよわく、したがって出わたりの破裂音も弱い。喜界島阿伝方言の〔p‘ａｎａ〕<鼻>の〔p‘〕は呼気がそれほど弱くないのに、閉鎖はそれをしっかり食止めるように営まれず、閉鎖したくちびるが次第にふくれ気味となり、したがって口むろ内の気圧はあまり高まらず、破裂音も弱い。持続部において両唇の間から呼気が漏れれば両唇摩擦音の〔Φ〕になるような音である。

この呼気のつよさのちがいは、ふたつの方言群の母音の変化のちがいをもたらしただけでなく、それと同時に、あるいはそれに付随して、子音においても変化をひきおこしている。あとでやや詳細にのべるように、宮古八重山方言群は、つよい呼気が原因で語頭の／ｗ／を／ｂ／に変化させている。また、標準語のハ行、カ行の子音／ｈ／／ｋ／に対応する破裂音／ｐ／／ｋ／の摩擦音化が奄美沖縄方言群、宮古八重山方言群の両方にみられるが、両者はことなる方向への変化を示している。

【表３】	雲	腰	船	骨
石垣方言	ｈｕｍｕ	ｋｕｓɿ	ｈｕｎｉ	ｐｕｎｉ
平良方言	ｆｕｍｕ	ｋｕｓɿ	ｆｕｎｉ	ｐｕｎｉ
大宜味方言	ｋｕｍｕ	ｈｕʃｉ	ｐｕｎｉ	ｈｕｎｉ
今帰仁方言	k’ｕｍｕ：	ｈｕʃｉ：	p‘ｕｎｉ	p‘ｕｎｉ

宮古八重山方言群では奥舌せま母音／ｕ／に先行する、無声の両唇破裂音／ｐ／が唇歯の摩擦音／ｆ／もしくは声門摩擦音／ｈ／に変化しているのに対して、奄美沖縄方言群のうちの沖永良部与論沖縄北部諸方言では奥舌半ひろ母音／ｏ／に先行する両唇破裂音／ｐ／が声門摩擦音／ｈ／に変化している。

宮古八重山方言群	*ｐｏ	→	ｐｕ	*ｐｕ	→	ｆｕ／ｈｕ
奄美沖縄方言群	*ｐｏ	→	ｈｕ（p‘ｕ）	*ｐｕ	→	ｐｕ／p’ｕ

宮古八重山方言群では奥舌せま母音／ｕ／に先行する無声の軟口蓋破裂音／ｋ／が唇歯の摩擦音／ｆ／もしくは声門摩擦音／ｈ／に変化しているのに対して、奄美沖縄方言群のうちの沖永良部与論沖縄北部諸方言では奥舌半ひろ母音／ｏ／に先行する軟

口蓋破裂音／ｋ／が声門摩擦音／ｈ／に変化している。

宮古八重山方言群	*ｋｏ	→	ｋｕ	*ｋｕ	→	ｆｕ／ｈｕ
奄美沖縄方言群	*ｋｏ	→	ｈｕ（k'ｕ）	*ｋｕ	→	ｋｕ／k'ｕ

一見、逆にみえるこの現象も呼気流のつよさのちがいによって生じている。せま母音とひろ母音をくらべると、せま母音は声道がせまく、音響管としての効率のわるさから、よりつよい呼気を必要とし、声道内の呼気圧もたかい。それに対して、ひろ母音は声道がひろいために、声道をながれる呼気の量、つよさが一定であれば、声道内の呼気圧はせま母音にくらべてひくい。

こうして、宮古八重山方言群では、奥舌せま母音／ｕ／のせまい声道をつよい呼気がながれることによって、先行する破裂音／ｐ／／ｋ／の調音点がおしひろげられて摩擦音に変化する。一方、大宜味方言などの奄美沖縄方言群では、よわまった呼気に呼応して、奥舌半せま母音／ｏ／に先行する破裂音／ｐ／／ｋ／の調音点での緊張もよわまり、そこからもれるように、摩擦音化するのである。さらに、奄美沖縄方言群では、ひろ母音／ａ／、および半ひろ母音／ｅ／に先行する／ｐ／／ｋ／も摩擦音化することがある。

2.3. 宮古八重山方言群のなかでの宮古諸方言

宮古八重山方言群の下位区分に関しては諸説があり、まだ決着をみているわけではない。与那国方言の独自性を強調して、宮古八重山方言群全体に対立する方言として与那国方言を独立させ、琉球諸方言全体を奄美沖縄方言、宮古八重山方言、与那国方言のみっつに区分する研究者もいる。また、加治工真市1997は、与那国方言を八重山方言のさらに下位の方言とみなしている。加治工真市1997が主張するように、与那国方言は八重山諸方言との共通性もおおく、八重山諸方言と共通の基盤のうえに成立していることはうたがいない。しかし、与那国方言には、他の八重山諸方言にはみられない固有の音声現象もおおく、他の八重山諸方言の下位方言に比較してその独自性はつよい。与那国方言と八重山諸方言のさらに詳細な研究が必要であるが、本稿では、上村幸雄1991にしたがって、与那国方言を八重山諸方言から独立させて、宮古八重山方言群を宮古諸方言、八重山諸方言、与那国方言のみっつに区分することにする。

宮古八重山方言群の下位方言が島ごとにおおきく違うことはもちろんだが、その下位方言に属する村落ごとの方言差もちいさくなく、その呼気のつよさも一様ではない。しかし、奄美沖縄方言群に比較したばあい、宮古八重山方言群は全体としてつよい呼気を特徴とする方言であるといえるだろう。あるいは、下位方言のなかには、現在では呼気はよわまってはいても、過去においてつよい呼気を特徴とする方言であったとおもわれる方言もある。

宮古八重山方言群は、奄美沖縄方言群にくらべて、全体としてつよい呼気の使用を特徴とする方言である。古代日本語の／w／が宮古八重山方言群で／b／に変化し、同じく古代日本語の前舌せま母音／i／が舌先母音／ɿ／に変化するという、宮古八重山方言群全体に共通する特徴がみられる。

宮古八重山方言群のすべての下位方言に共通にあらわれる特徴として、古代日本語のワ行の子音／w／に対応して、宮古八重山方言群では／b／があらわれることをあげることができる。この変化を上村幸雄1989はつぎのようにのべている。

> 宮古八重山方言群の語頭における／w／→／b／の音韻変化は、つよい呼気流に対する口びるの「ふんばり」のうむ音韻変化の好例である。この宮古八重山方言群全域にみられるワ行子音のバ行子音への全面的そして規則的な移行は語頭にかぎられておこるが、呼気流がもっともつよい語頭音節でこそこのような調音強化の音韻変化があらわれて自然なのである。

奥舌せま母音／u／が後続する他の母音と結合して音節をひらく位置にたち、子音として機能するものが半母音／w／であるが、この半母音／w／は、調音的に／u／と共通の特徴を有し、空気力学的な特徴も／u／とおなじ傾向をもつものとおもわれる。すなわち、／u／は、声道がせまく、音響管としての効率のわるさからある程度のきこえを保証するためには、よりつよめの呼気をもって発音されなければならない。口びるをまるめない標準語の／u／〔ɯ〕とはことなり、琉球諸方言の／u／〔u〕は、くちびるのまるめを特徴とする。宮古八重山方言群のようなつよめの呼気の使用を特徴とする方言群にあって、くちびるで調音される／w／がくちびるでの「ふんばり」によって破裂音に移行したのであろう。

【表4】	腹	夫	兄弟（「ゑけり」に対応）
平良市西里	bata	butu	bikiɿ

城辺町保良	ｂａｔａ	ｂｕｔｕ	ｂｉｋｉɿ
多良間村塩川	ｂａｔａ	ｂｕｔｕ	ｂｉｋｉ̩
石垣市石垣	ｂａｄａ	ｂｕｄｕ	ｂｉｇｉｒɿ
竹富町小浜	ｂａｔａ	ｂｕｇｅ：	ｂｉｇｉｒɿ
竹富町波照間	ｂａｔａ	ｂｕｄｕ	ｂｉｇｉｒɿ
与那国町祖納	ｂａｄａ	ｂｕｔ'ｕ	ｂｉｇｉ

／ｗ／→／ｂ／の変化は、以下のように古代日本語のワ行の各段に対応する音節でおこっている。

「わ」〔ｗａ〕　〔ｂａｒａ〕藁、〔ｂａɿ〕割る、〔ｂａｒｏ：〕笑う
「ゐ」〔ｗｉ〕　〔ｂᶻɿ：〕坐る、〔ｂᶻɿ：〕亥、（十二支の一つ）
「ゑ」〔ｗｅ〕　〔ｂｉｇｕɿ〕えぐる、〔ｂｊｕ：ɿ〕酔う
「を」〔ｗｏ〕　〔ｂｕｄｕɿ〕踊り、〔ｂｕｂａ〕叔母、〔ｂｕ：〕緒、繊維
（用例はいずれも平良市西里方言）

／ｗ／→／ｂ／の変化は、語頭においてのみおこっていて、語中においては原則的におこっていない。このことから、語中の／ｗ／が消失したあとに、／ｗ／→／ｂ／の変化がおきたことが容易に推測される。これは「ハ行転呼音」とよばれる現象についてもいえることである。すなわち、語頭において古代日本語の／ｐ／を保持する宮古八重山方言群であるが、語中では、日本語諸方言と同様に／ｐ／→／Φ／→／ｗ／がおき、さらに語中の／ｗ／が消失するという現象がおきている。日本語諸方言のばあい、ひろ母音／ａ／と結合するばあいのみ、この／ｗ／を保持するのに対して、宮古八重山方言群のばあい、ひろ母音／ａ／と結合するばあいでも／ｗ／を消失させている。

語中のワ行
あわ（泡）〔ａ：〕、せわ（心配）〔ｓｊａ：〕
あゐ（藍）〔ａｉ〕、なゐ（地震）〔ｎａｉ〕
さを（竿）〔ｓａｕ〕、あを（青）〔ａｕ〕、とを（十）〔ｔｕ：〕、めをと（夫婦）〔ｍｊｕ：ｔｕ〕
語中のハ行

あは（粟）〔ａ：〕、　かは（皮）〔ｋａ：〕、　なは（縄）〔ｎａ：〕
かひな（腕）〔ｋａｉｎａ〕、はひ（灰）ｋａｒａｐａ˥、
はへ（蠅）〔ｐａｉ〕、まへ（前）〔ｍａｉ〕、うへ（上）〔ｕｉ〕
とほし（遠い）〔ｔｕ：ｋａ˥〕、

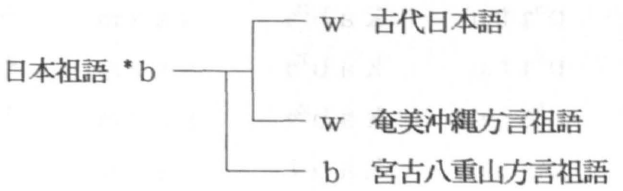
（以上の語例はいずれも宮古城辺町保良方言）

注）「ふんばり」を上村1987はつぎのように規定している。

声道をながれる呼気の圧力に対抗して、舌、口びるなどの調音器官が声道における位置、状態をたもとうとするために筋肉的に緊張すること。またその緊張によってその調音器官の位置、形状に若干の変形がおこる現象。

注）宮古八重山方言群にみられる／ｂ／が日本祖語にさかのぼるほどのふるい特徴であって、他の日本語諸方言において／ｂ／→／ｗ／という変化がおこったとみるかんがえがある。もし、宮古八重山方言群の／ｂ／を日本祖語にさかのぼるものだとすると、日本祖語から琉球諸方言と本土方言が分岐したあとに本土諸方言で／ｂ／→／ｗ／の変化がおこったとみなければならない。そしてそれとほぼおなじ変化が奄美沖縄方言群でもおこったとみなければならない。それほどに古代日本語にみられる／ｗ／と奄美沖縄方言群の／ｗ／とには共通性が多い。また、基礎語彙の多くや、「なゐ（地震）」のような古語にふくまれる語中の／ｗ／がハ行転呼音と連動する変化によって消失しているのに、〔ｔʃａｂａｎ〕（茶碗）のように漢語でしかもさほどふるいともおもえない単語の語中で／ｗ／が／ｂ／に変化しているのをみると、／ｗ／→／ｂ／の変化を想定するのが自然ではなかろうか。また、その／ｗ／→／ｂ／の変化がそれほどふるい時代におきていないことも予想されるが、どうだろうか。

それに、宮古八重山方言群の／ｂ／を日本祖語にまでさかのぼるものだとみなすと、奄美沖縄方言群と宮古八重山方言群の歴史的関係をしたに示したようにみなければならなくなるのではないだろうか。もしそうだとすると、宮古八重山方言群の／ｂ／を日本祖語にまでさかのぼらせるこのかんがえを支持することはできないだろう。いずれにせよ、結論をだすにはもうすこしくわしい検討が必要である。



先にものべたように、宮古八重山方言群では、つよい呼気によって語頭の前舌せま母音／ｉ／がまえにおしやられて、舌先母音／ɿ／に変化したが、この舌先母音はつよい呼気による空気力学的な影響を後続する流音〔ｒ〕や半母音〔ｊ〕〔ｗ〕にあたえ、【表５】の宮古島の平良市西里や城辺町保良の方言の〔ｓｓａm̩〕〔ᶻɿｚｕ〕にみられるように摩擦音〔ｚ〕や〔ｓ〕にかえる。この後続の子音に影響をあたえる進行同化（progressive assimilation）は、筋弾性的な条件よりも空気力学的な条件がつよくはたらいているとみるべきだろう。

〔ᶻɿｚａn̩〕　叱らない（「言わない」に対応）
〔ᶻɿｚａｒａ〕鎌（首里方言？ｉｒａｎａ）
〔kˢɿｓａn̩〕切らない
〔ʃʃａᶻɿ〕　白蟻

八重山諸方言においても同様の変化があったが、石垣市石垣〔ｉdzｕ〕や竹富町竹富の〔ｉdʒｕ〕のように、そののちに呼気のよわまりがあって、語頭の舌先母音／ɿ／が前舌狭母音／ｉ／に逆もどりしたのだろう。ところが、後続する摩擦音は、そのまま破擦音になって保存されたとみるべきだろう。宮古諸方言と八重山諸方言を比較すると、舌先母音にともなう摩擦のつよさは、宮古諸方言の方が概してつよいようである。とくに、語頭に舌先母音／ɿ／があらわれる環境を比較したばあい、池間島方言や大神島方言をのぞく宮古諸方言は、〔ᶻɿ〕のように表記されるほど摩擦がつよいのに対して、新城島方言などをのぞく八重山諸方言のばあい、摩擦のよわい〔ɿ〕があらわれるか、あるいは、前舌せま母音／ｉ／に変化しているところがおおい。

【表５】	人	紙	虱	魚
平良市西里	pˢɿｔｕ	ｋａｂᶻɿ	ｓｓａm̩	ᶻɿｚｕ
平良市大神	pˢɿｔｕ	ｋａｐɿ	ｓｓａm̩	ɿω
平良市池間	ｈｉｔｕ	ｋａｂｉ	ｓｓａɴ	ɿｚｕ

城辺町保良	pˢɿtu	kabᶻɿ	ssam̩	ᶻɿzu
下地町川満	pˢɿtu	kabᶻɿ	ssam̩	ᶻɿzu
多良間村塩川	pˢɿtu	kabᶻɿ	ssam̩	ᶻɿzu
石垣市石垣	pɨtu	kabi	ssaɴ	idzu
竹富町竹富	pˢɿtu	kabi	ʃʃaɴ	idʒu
竹富町新城	pˢɿtu	kapˢɿ	ssaɴ	ᶻɿdzu
竹富町波照間	pɨtu	kapɿ:	ˢsaɴ	ju:
与那国町祖納	t'u	kabi	tzaɴ	iju

与那国方言では、／i／から変化してきた舌先母音／ɿ／をさらに／i／に変化させている。／o／→／u／、／e／→／i／の変化だけでなく、また、二重母音の／ao／／au／などが融合してできたなが母音／o：／も、みじか母音／u／に変化させているし、／ai／／ae／は、逆に融合せず、／ai／になっている。与那国方言は、みじか母音、なが母音ともに、完全に3母音システムに移行させた方言である。

／su：／竿、／huta／包丁、／suru／お盆（精霊に対応）
／tubu／豆腐、／susiki／葬式

上記の単語は、／ao／／au／のような二重母音が融合して／o：／のような奥舌の半ひろ母音ができたあとに、さらにせま母音化して、奥舌せま母音／u：／に変化したものである。与那国島方言も、はじめから3母音システムだったわけではなく、音韻変化の結果、3母音システムに移行したのである。

*sawo → *sao → so: → su:（竿）

与那国方言のもうひとつのおおきな特徴は、標準語のヤ行の子音／j／に対応する子音を／d／に変化させていることである。

／dama／山、／da：／家、／dagu／厄、／dagaɴ／薬罐
／dumi／嫁、／duru／夜、／dugu／横、／duga／四日
／dumi／弓、／duga／床、／duda／枝、／du：／湯

この／ｊ／→／ｄ／の変化は、呼気のつよかった時代に、〔ｊ〕→〔ʒ〕のような摩擦音化があり、のちに呼気のよわまった時代があって、そのときに、〔dʒ〕→〔ｄ〕のように破裂音化したとかんがえられる。

このように、呼気はつねに一定のつよさをたもつわけではなく、ある時期につよかった呼気がよわくなることもあるのである。与那国方言には、この呼気のつよかった時期の音韻変化と、呼気のよわくなった時期の音韻変化とがみられる。

注）上村幸雄1987は、与那国方言の母音システムをつぎのようにのべている。

宮古八重山方言群の最西端の与那国島方言は日本列島、琉球列島の諸方言の中でただひとつ、３母音制度（長短を音韻論的に区別しない／ａ／／ｉ／／ｕ／の３母音）を実現させた方言であるが、この方言においては、宮古八重山方言群の大部分の方言にみられるこのようなつよい呼気流という特徴がかげをひそめてしまう。

半ひろ母音〔ｅ〕〔ｏ〕は与那国方言にも観察されるが、これはせま母音／ｉ／／ｕ／のバリアントとみなされるものであるらしい。また、なが母音〔ａ：〕〔ｉ：〕〔ｕ：〕も存在するが、音韻論的には長短の区別をもたないようである。近年の標準語の影響によって〔ｅ〕〔ｏ〕は、確固たる地位をしめるようになってきているようである。

注）柴田武1972は、与那国方言の母音について、つぎのようにのべている。

語末以外でも母音の長短によって対立するような語はない。このことから考えて、この方言（与那国方言）では母音の長短は音韻論的に無意味である。…

母音は三つである。／ｕ／は、すでに上例が示すように、／ｕ／は〔ｕ〕と〔ｏ〕の間をゆれている。円唇ではあるが、基本母音の〔ｕ〕ほど狭くない。もちろん、ｕとｏが対立して語を区別することはないので、／ｕ／一つ認めれば足りる。

音素／ｉ／も、〔ｉ〕と〔ｅ〕の間をゆれている音であるが、音素として二つ認めるには及ばない。